# 日本語インタビューテストにみられる応答開始時のレベル別特徴

## －「くり返し」と「考えている」表現に注目して－

西部由佳（早稲田大学）・金庭久美子（立教大学）・岩佐詩子（桜美林大学）
坂井菜緒（武蔵大学）・萩原孝恵（山梨県立大学）・奥村圭子（山梨大学）

**要　旨**

実際の会話では、何か質問された時にすぐに実質的な返答をするのではなく、大抵は何らかの音声を発してから返答に入る場合が多い。そこで、本研究では日本語母語話者と非母語話者の応答開始時の相互的なやり取りのレベル別特徴を記述することで、非母語話者の習得過程を明らかにする。データは、国立国語研究所『日本語学習者会話データベース』より、中国語を母語とする日本語非母語話者計7名（初級-上～超級）のインタビューテストで、特に応答開始時の「くり返し」と質問に対し実質的返答に至るまでの「考えている」表現に注目した。分析の結果、「くり返し」は9種類に分類でき、インタビュアーの助けが必要な初級から、自立に向けて上級、超級へと変わっていく様子がわかった。また「考えている」表現の分析により、会話相手に意識が向かない段階から、会話相手の発話や存在を意識し配慮できる段階に至るまでの表現とレベル別特徴を具体的に記述した。

**【キーワード】**：日本語インタビューテスト　応答　レベル別特徴　くり返し
考えている表現

## 1．はじめに

実際の会話では、話し手の問いかけに対し、聞き手がすぐに返答できる場合もそうでない場合も、相手の発話のくり返しや「あー」「んー」など何らかの音声の後に、実質的な内容を含む返答を始めることが多いようである。

本研究では、ACTFL-OPIによる日本語インタビューテスト（以下、OPI[1)]）を収集した『日本語学習者会話データベース』[2)]を用い、インタビュアー（以下、T）と日本語非母語話者（以下、I）の応答開始時のやり取りに注目し、TとIの相互的なやり取りのレベル別特徴を記述することで、Iの習得過程を明らかにすることを目的とする。本研究が注目するのは、下記1、2のような例である。〈　〉は聞き手の相づちを示す。

例1　T：日本のそういうファッションのどんな所がすきですか

I： **ファッション**は〈ん〉、1番、あー、1番、あ見やすい　〈中級-上C 271〉

例2　T： わかりましたはい、あの今日は、このあとはどうされるんですか

I： **このあとは**そうですね〈ん〉、あ午後から、…　〈超級G 230〉

そこで、本研究では二つの調査を実施する。調査1では、例のような応答開始時の「くり返し」（太字）に焦点を当て、TとIの「くり返し」のレベル別使用状況を分析する。調査2では、調査1の「くり返し」では明らかにできない上級以降の応答開始時の特徴を探るため、分析対象を「くり返し」（太字）だけでなく、Tの質問に対してIがターンを受け取ってから実質的返答を行うまでの発話に広げ（下線）、これを「考えている」表現とし検討する。

## 2．先行研究

「くり返し」の先行研究として、Tannen（1989）、中田（1992）、Rost & Ross（1991）、福富（2010）を取り上げる。「考えている」表現に関連する研究として、OPIデータを用いた土屋（2013）と松田他（2013）の言いよどみ、フィラーの研究をみる。

「くり返し」の機能について、Tannen（1989）は親しい友人同士の英語会話における「くり返し」を分類している。中田（1992）はTannen（1989）を受けて、親しい友人同士の会話だけでなく様々な日本語会話を対象に、日本語における「くり返し」を分類している。そして、「くり返し」にレベル別特徴があることを明らかにしたのがRost & Ross（1991）で、英語学習者のくり返しを習得度別に分析し、初級段階の学習者はくり返すことをストラテジーとして使うが、習得が進むにつれ、こうした「くり返し」が出にくくなることを指摘している。福富（2010）は、中田（1992）の「くり返し」の定義及び「くり返し」の機能の分類を再考し、日本語母語話者と初級、中級話者の自由会話における「くり返し」のレベル別特徴を分析している。その結果、初級と中級では使用状況が異なり、特に間つなぎ・時間稼ぎの「くり返し」が中級では頻繁に使用されると述べているが、上級、超級話者の「くり返し」の分析は行っていない。そこで、本研究では対象を上級、超級話者に広げ検討する。

次に、「考えている」表現に関連する研究として、土屋（2013）は、本研究と同じデータベースを用いIの発話の言いよどみについて量的に分析し、レベル別に特徴があるとしている。言いよどみの習得は、中級-中レベルから始まり、その後レベルが上がるにつれ複数の表現を組み合わせて使用するようになり、超級になるとより洗練された使用になると指摘している。しかし、具体的にどのように使われているかは明らかにしていない。松田他（2013）は、超級話者のOPIをテキストマイニングにより分析し、その談話的特徴として「その」「この」「あのー」という結束性にかかわる指示表現のフィラーや、「もう」「まあ」「いや」等の聞き手配慮にかかわるフィラーの使用がみられたとしている。いずれの研究もインタビューにおけるIの発話全体を分析対象として、言いよどみ、フィラーを分析している。しかし、本研究では応答開始時

のTの質問に対するIの発話に着目し、言いよどみやフィラーといった枠組みにとらわれることなく、実質的返答に至るまでの「考えている」表現の特徴を明らかにする。

## ３．調査概要

本研究では、パイロット調査としてまず中国語を母語とするIのデータから取り上げる。分析対象は、『日本語学習者会話データベース』のうち音声データがある初級-上（A 227、B 378）、中級-上（C 271、D 309）、上級-上（E 259、F 316）の各２名と超級（G 230）１名、計７本のOPIデータである（数字はデータベース番号）。ただし、インタビュー開始時の冒頭の挨拶とロールプレイは調査外とした。

調査１では、応答開始時にみられるTとIの「くり返し」に注目し分析する。調査２では、調査１の結果に基づき調査１の「くり返し」を含め、Iの「考えている」表現に着目する。「考えている」表現とは、ターン受取後から実質的な返答に入るまでの表現のことである。なお、「くり返し」及び「考えている」表現については抽出の際、調査者６人で該当箇所を音声と文字の両側面から複数回確認し判断した。

## ４．調査１

### ４．１．応答開始時の「くり返し」

調査１ではTとIの「くり返し」をみる。「くり返し」は、福富（2010）の定義を採用し、「既出の発話（あるいはその一部）を用いて行った発話であり、くり返されたもとの発話の要素を一部あるいは全部含むもの」（福富 2010：109-110）とする。ここでいう「もとの発話」とは「直前の相手の発話」（福富 2010：117）のことである。

### ４．２．調査結果

#### ４．２．１．「くり返し」の表現の分類と使用例

福富（2010）は自由会話を対象に「くり返し」を10項目に分類しているが、本研究では、福富を参考にインタビューテストの実態に合わせた調整を行い、表１のように「話題の取り出し・トピック化」「受信応答」「聞き取れた音のみのくり返し」「返答としてのくり返し」「確認要求」「説明要求」「意図の合致表明」「考えている・時間稼ぎ」「感情」の９つに分類し分析を行った。

まず、表１の「①話題の取り出し・トピック化」の例では、IはTの発話の中から「ファッション」という言葉を取り出し、自身の発話のトピックとして用いている。「②受信応答」では、IはTの発話を聞いて「あー、ギョーザ」と下降イントネーションで話すことで、「ギョーザのことですね」と理解したことを示している。「③聞き取れた音のみのくり返し」は、初級で主にみられたが、IはTの質問の意図が理解できず、とりあえず聞き取れた音のみをくり返している。「④返答としてのくり返し」（4a）の例では、Tの質問に対してIは「はい」の代わりに「卒業」とくり返している。ここは

表１ 「くり返し」の９つの分類と例

| 分類 | 例　T：日本語母語話者　I：日本語非母語話者 |
|---|---|
| ①話題の取り出し・トピック化 | （1） T： 日本のそういう**ファッション**のどんな所がすきですか<br>I： **ファッション**は〈ん〉、1番、あー、1番、あ見やすいはたぶん、えっと、 〈中級-上C 271〉 |
| ②受信応答 | （2） T： んーあそうですか、**ギョーザ**はどうやって作るんですか<br>I： あー、**ギョーザ**［↓下降］ 理解した<br>T： うん、教えてーくださいませんか 〈初級-上A 227〉 |
| ③聞き取れた音のみのくり返し | （3） T： あーそうですか〈あい〉、じゃ、**学校**のある日は毎日、そういう生活なんですね<br>I： あー、**学校**、＊ 理解できていない<br>T： お休みの日は 〈初級-上A 227〉 |
| ④返答としてのくり返し | （4a） T： あーそうですか〈はい〉、あじゃ、えっと【姓】さんは、もう中国の大学を**卒業**したんですか<br>I： あー**卒業** 未完成なくり返し<br>T： あーそうですか 〈初級-上A 227〉<br>（4b） I： そうですねま電車で4時間ぐらいで、400キロぐらいですね<br>T： は－、＊でも**遠い**ですよね ｛笑｝<br>I： まあ**遠い**といえば遠いですけども〈ん―〉、まあ ｛笑｝ 〈超級G 230〉 |
| ⑤確認要求 | （5） T： あーそうですか〈はい〉、どうやって行くんですか〈んー〉、**上野**まで<br>I： **上野**（↑）〈うん〉、んー、**うえのー**［上野］（↑） 不完全な理解<br>T：【姓】さんの家から上野までどうやって行くんですか〈初級-上A 227〉 |
| ⑥説明要求 | （6） T： すいません、**国には、いない**んですね〈んー〉、人々は<br>I： く、んー〈んー〉、**国にはいない**［↑上昇］<br>T： うん、例えば国を守る人だ、だと、台湾を守らなくちゃいけないですよね 〈初級-上B 378〉 |
| ⑦意図の合致表明 | （7） I： あー〈ん〉毎朝〈ん〉、んーじゅうくない起きます<br>T：ん、ん何<br>I：じゅ、10時 言い直し<br>T：**10時**あーあー<br>I：あー、**10時**ぐない［ぐらい］、おひます［起きます］〈初級-上A 227〉 |
| ⑧考えている・時間稼ぎ | （8） T： …えっとー、おもしろいハプニングとか何か**北海道**で覚えていることありますか<br>I： **北海道**〈んー〉、んー、**ほっかいと**［北海道］、富良野、行ったときは〈んー〉、ちょっと、… 〈中級-上D 309〉 |
| ⑨感情 | （9） I： そうですね〈あー〉、えっとー〈んー〉、雪を見たいから〈あっ〉、＊＊＊、ん〈ん〉、北海道行きます<br>T： ん、でも**寒いです**からね 共感・一体感表出<br>I： **寒いです**＊＊<br>T： 十分準備をして〈そうそうそうそう ｛笑｝〉、 〈中級-上C 271〉 |

＊データベースでは、Iの名前を【姓B】と表記しているが、本稿では【姓】と記す。

本来なら「はい、卒業したんです」と言うべきところだが、うまく文が作れず未完成な返答で終わっている。「⑤確認要求」では、IはTの発話の中の「上野」に、Iは上昇イントネーションを用いてTの発話の「上野」をくり返すことで、確認している。次の「⑥説明要求」は「国にはいない」と上昇イントネーションで発話の意図の説明を求めているが、それに対してTは「うん、例えば」と説明を求めている。「⑦意図の合致表明」では、TがIの発話「じゅ、10時」の確認として発した「10時」に、「そうです」の意味で、「あー10時ぐない」とくり返している。「⑧考えている・時間稼ぎ」では、Tの質問に、Iは「北海道」とくり返しながら時間を稼ぎ、自身の次の発話を考えている。最後に「⑨感情」では、Tの「寒いです」に気持ちを込めてくり返すことで、相手の発話に共感していることを示している。

### ４．２．２.「くり返し」の機能と出現数

調査の結果は、表２の通りである。表２の左側が日本語非母語話者であるIのレベル別結果、右側がインタビューを行った日本語母語話者Tの結果を示している。

表２ 「くり返し」機能とその出現数

| 本研究における分類 | | 日本語非母語話者I | | | | | | | 日本語母語話者T | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 初級-上 | | 中級-上 | | 上級-上 | | 超級 | 初級-上 | | 中級-上 | | 上級-上 | | 超級 |
| | | A | B | C | D | E | F | G | A | B | C | D | E | F | G |
| ①話題の取り出し・トピック化 | | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 4 | 2 | 4 | | | 1 | 1 | | |
| ②受信応答 | 理解した | 4 | 2 | | | | | | 16 | 19 | 3 | 1 | 1 | 2 | 1 |
| | そうですか→そうパターン | 1 | | 10 | | | 1 | | | | | | | | |
| ③聞き取れた音のみのくり返し | | 5 | 4 | | | | | | | 1 | | | | | |
| ④返答としてのくり返し | 未完成なくり返し | 4 | | | | 1 | | | | | | | | | |
| | 単純なくり返し | 10 | 5 | 2 | | | | 1 | | | | | | | |
| | くり返し＋α | | 1 | 5 | 1 | 1 | 7 | 2 | | | | 1 | 2 | | |
| ⑤確認要求 | 上昇イントネーション | 6 | 2 | | 4 | 2 | 1 | | 14 | 5 | 3 | 4 | | | |
| | 非上昇イントネーション＋「か」 | | | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | 2 | | 4 | | 1 |
| ⑥説明要求 | | | 1 | | | | | | | 3 | | 1 | 1 | | |
| ⑦意図の合致表明 | | 7 | | 1 | 2 | | | | | 1 | | | | | |
| ⑧考えている・時間稼ぎ | | 1 | 6 | 5 | 7 | | 2 | 1 | | 1 | | | | | |
| ⑨感情 | 感情表出 | | 1 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | | | |
| | 共感・一体感表出 | | | 1 | | | | | 1 | | 2 | 1 | | | |
| 計 | | 44 | 27 | 29 | 18 | 7 | 15 | 6 | 36 | 32 | 11 | 9 | 9 | 2 | 2 |

まず、Iについてみていく。初級で多かったのは「③聞き取れた音のみのくり返し」（A5 例、B4 例）、「④返答としてのくり返し」の中の「未完成なくり返し」（A4 例）、「単純なくり返し」（A10 例、B5 例）で、これらは中級以上ではほとんどみられなかった。初級では、表1の（4a）の例のようにTの問いに「はい」と答える代わりに「あー卒業」とくり返し、未完成な返答に終わっているものや、単純にくり返しているだけのものがみられた。

中級では「⑧考えている・時間稼ぎ」（C5 例、D7 例）が初級（A1 例、B6 例）より多かった。例えば、表1の（8）は中級話者のD 例であるが、Tの質問に、「北海道」とくり返しながら時間を稼ぎ、自身の次の発話を考えている様子が窺える。

上級、超級では、初級・中級に比べて「くり返し」の全体の数が減っている点が特徴的である（E7 例、F15 例、G6 例）。「④返答としてのくり返し」においても初級や中級とは異なり、表1の（4b）の例のように、超級では問いに対して単純にくり返すのではなく、「まあ遠いといえば遠いけど」のように「くり返し＋ α」の返答がみられた。また、「③考えている・時間稼ぎ」もあまりみられなかった（F2 例、G1 例）。

次に、Tについてみていく。Tのくり返しの全体の数は、Iが初級の場合に多く、Iに対してTは「②受信応答」（A16 例、B19 例）、「⑤確認要求」（A 14 例、B5 例）、「⑥説明要求」（B3 例）を多く行っていた。これらは、中級、上級、超級では大幅に減少した。下記（10）のTの下線部は「②受信応答」の「理解した」の例である。

（10） T： タイペイ〈はい〉、（中略）どんな町ですか

I： んー、台湾の、1番大きいな町です〈1番大きい町〉、はい〈ふーん〉、だから、ひっとー［人］が〈ん〉多くて〈ん〉、**東京みたいな町** {笑}

T： ふーん、**<u>東京みたいな町</u>**〈はい〉、ほー、＊ 〈初級-上B 378〉

Tの質問にIは「東京みたいな町」と答え、それにTが「東京みたいな町」とくり返すことで、Iの発話を理解したことを示している。この他にも、TはIに対して「⑤確認要求」や「⑥説明要求」を行うことで、Iの発話を明確にしながら会話を進めていた。Iが中級以上になると、このようなTのくり返しがみられなくなる。

### ４．３．考察

調査1では、インタビュー応答開始時の「くり返し」に着目し分析を行った。

まず、Iについてみていくと、初級では「④返答としてのくり返し」の中の「未完成なくり返し」「単純なくり返し」が多くみられた。これはまだ自身でなかなか文が作れない初級話者がTの質問に答えるための一つのストラテジーといえるかもしれない。

一方、Tは、初級のIに対し、「②受信応答」を用いることで「あなたの言っていることを理解した」と励まし、「⑤確認要求」「⑥説明要求」で、Iの発話を明確にしながら会話を進めていた。牧野他（2001）は、OPIにおいてテスターが積極的にとるべき態度として「被験者の言うことに強い興味と共感を示すこと」（牧野他 2001：36）を

あげている。今回の調査から、初級レベルでは文が作れないIに対してTが「くり返し」を用いることで、Iの発話に興味・共感を示し励ましながら会話を導いているといえる。しかし、中級以上ではこの数が減っていることから、TはIの手助けをする必要がなくなり、Iは自立して会話を進めていけるようになっていると考えられる。

中級になると、Iのくり返しに「⑧考えている・時間稼ぎ」が多くみられた。福富（2010）は、初級と中級の「間つなぎ・時間稼ぎ」の違いを指摘し、「会話に参加していることを示したり、話を途切らせずに続けるのに適当であるということを中級学習者は体得し、多用したのではないかと推測される」（福富 2010：121）としている。今回の結果においても「くり返し」の多用が観察されたことから、「⑧考えている・時間稼ぎ」の「くり返し」は、中級レベルのストラテジーの一つだと考えられる。

上級、超級になると、前出表2で示したように「くり返し」全体の数が減っているが、特に「⑧考えている・時間稼ぎ」が初級や中級に比べ少ない。「くり返し」がみられたとしても、「1. はじめに」で示した例2のように、単なるくり返しではなく「トピック化＋そうですね＋あ＋実質的返答」になっており、「くり返し」だけで上級、超級の応答開始時の特徴を説明することが難しい。

例2　T： わかりましたはい、あの今日は、**このあとは**どうされるんですか

　　I：**このあとは**そうですね〈ん〉、あ午後から、…　　〈超級G 230〉（再掲）

このように上級、超級になると「くり返し」だけでない、上級、超級ならではの表現を用いて考えたり、時間稼ぎをしたりしている可能性がある。そこで、調査2では、Tの質問に対してIがターンを受け取ってから実質的返答を行うまでの発話を「考えている」表現とし、分析の観点を広げ、考えているとみなされる箇所を抽出し、分析する。

## 5．調査2

### 5．1．応答開始時の「考えている」表現

調査2では、調査1を踏まえて、「考えている」表現についてTとIの相互的なやり取りのレベル別特徴をみる。調査2でも調査1と同じデータを用いる。

調査2の「考えている」表現の抽出では、調査1で用いた「⑧考えている・時間稼ぎ」のくり返しの箇所だけでなく、Tの質問に即答しないで考えていると思われる箇所を全てみていくことにした。そのため、調査1の分類であっても、即答していない場合は再考することにした。例えば、前出表1の（6）の場合、調査1では「国にはいない」（太字）のくり返しのみに着目したが、調査2では、「く、んー」があるため、即答していないと判断し、「く、んー」（太字下線）を「考えている」表現とした。

（6）　T： すいません、国には、いないんですね〈んー〉、人々は

　　I：く、んー〈んー〉、国にはいない［↑上昇］

　　T：うん、例えば国を守る人だ、だと、…　　〈初級-上B 378〉

## ５．２．調査結果

### ５．２．１．「考えている」表現の分類と使用例

まず、調査1で「くり返し」と判定したもののうち、考えているためにTの発話をくり返しているものを「a.くり返し」の表現とした。次に、実質的な発話の前の考えている際に現れるものを分類した。「んー」「あー」「えー」等は「b.母音類」、「えっと」「えと」等を「c.えっと類」とした。また、「例えば」「でも」等は「d.接続詞」、「ま」「まあ」等を「e.まあ類」とした。指示詞を用いた「あのー」「それは」等は「f.指示詞」とした。さらに「ちょっと」「なんか」「いや」等は「g.副詞・感動詞」とし、話題を捉え直す際の「h.そうですね」は一項目とした。そして、「談話において、

表３　各レベルにみられる「考えている」表現

| 分類 | 例 | 初級-上 | | 中級-上 | | 上級-上 | | 超級 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | E | F | G |
| a.くり返し | 〔音のみのくり返し〕 | ○ | × | × | × | × | × | × |
| | 〔単語のくり返し〕 | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × | × |
| | 〔トピック化〕 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| b.母音類 | んー、ん | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | あー、あ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| | えー、え | ○ | × | ○ | ○ | × | × | ○ |
| | おー | × | ○ | × | × | × | × | × |
| | その他（うー、ほーん） | × | ○ | ○ | × | × | × | × |
| c.えっと類 | えっと、えと、えとー、と | × | × | ○ | × | ○ | × | ○ |
| | んとー | ×* | × | × | ○ | × | × | × |
| d.接続詞 | でも | × | × | ○ | × | × | × | × |
| | で | × | × | ○ | × | × | × | × |
| | 例えば | × | × | ○ | ○ | × | × | × |
| | そういえば | × | × | × | × | × | × | ○ |
| e.まあ類 | ま、まあ、まあね | × | × | × | × | ○ | ○ | ○ |
| f.指示詞 | こう | × | × | × | × | ○ | × | × |
| | あの、あーの、あのー | × | × | × | × | ○ | ○ | ○ |
| | それは、その | × | × | × | × | ○ | ○ | ○ |
| g.副詞・感動詞 | ちょっと | × | × | ○ | × | × | × | × |
| | やはり、やっぱり | × | × | × | × | ○ | ○ | × |
| | たぶん | × | × | × | × | × | ○ | × |
| | いちおう | × | × | × | × | × | × | ○ |
| | いろいろ | × | × | × | × | × | × | ○ |
| | けっこう | × | × | × | × | × | × | ○ |
| | なんか | × | × | × | × | × | × | ○ |
| | いや、や | × | × | × | × | × | × | ○ |
| h.そうですね | 考えている「そうですね」 | × | × | × | × | ○ | ○ | ○ |
| i.メタ言語表現 | なんていいますか | × | × | × | × | ○ | × | × |
| | むずかしい質問ですね | × | × | × | × | ○ | × | × |
| | どうでしょう（ね）、どうなんでしょうね | × | × | × | × | ○ | ○ | × |
| | その過程を話すのは難しいですけれども | × | × | × | × | × | ○ | × |
| | ちょっと難しいんですが | × | × | × | × | × | ○ | × |

＊〈初級-上A 227〉の文字化資料には「んとー」と書かれていたが、実際の音声では母語話者が使用する「えっと」や「んとー」とは異なったため、数に入れなかった。

自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」（西條1999：14）は「i.メタ言語表現」とした。

### ５．２．２.「考えている」表現の使用とレベル別特徴

各レベルにみられるIの「考えている」表現の使用状況は、前頁表3の通りである。

本研究では広く「考えている」表現を扱い、数ではなく各レベルにおける使用の有無に焦点を当ててみることにした。例えば、「なんていいますか」は1例しかみられないが、出現したことに意味があると考え、各学習者が表中の「考えている」表現を使用している場合は「○」、その表現を使用していない場合は「×」とした。

表3を概観すると、「a.くり返し」「b.母音類」はどのレベルにもみられるが、「c.えっと類」「d.接続詞」は中級以上で出現した。一方、上級以上にみられるのは「e.まあ類」「f.指示詞」「g.副詞・感動詞」「h.そうですね」「i.メタ言語表現」となっている。

そこで、「考えている」表現としての「a.くり返し」を検討した結果、次の表4に示すように3つのタイプがあることがわかった。それは、Tの質問に対し、質問が理解

表4 「考えている」とみなされる「a.くり返し」の表現例

| | くり返しの方法 | 例 |
|---|---|---|
| a.くり返し | 〔音のみのくり返し〕 | (3) T：あーそうですか〈あい〉、じゃ、**学校**のある日は毎日、そういう生活なんですね<br>I：あー、**学校**、＊<br>T：お休みの日は 〈初級-上A 227〉<br>＊質問が理解できず、聞こえた音のみをくり返すもの（再掲） |
| | 〔単語のくり返し〕 | (8) T：…えっとー、おもしろいハプニングとか何か**北海道**で覚えていることありますか<br>I：**北海道**〈んー〉、んー、**ほっかいと**［北海道］、富良野、行ったときは〈んー〉、ちょっと、… 〈中級-上D 309〉<br>＊質問を理解してその一部を単語でくり返すもの（再掲） |
| | 〔トピック化〕 | (11a) T：あーそうですか、**日本の経済**を勉強しようと思ったのはどうしてですか<br>I：あー**日本の経済**は、すばらしい｛笑｝… 〈初級-上A 227〉<br>(11b) T：わかりましたはい、あの今日は、**このあとは**どうされるんですか<br>I：**このあとは**そうですね〈ん〉、あ午後から、アルバイトがありまして〈んー〉、… 〈超級G 230〉<br>＊質問を理解してその一部をくり返すことにより話題として取り上げるもの |

できず直前のTの発話のうち聞こえた音のみをくり返す〔音のみのくり返し〕、質問を理解してその一部を単語でくり返す〔単語のくり返し〕、質問を理解してその一部をくり返すことにより話題として取り上げる〔トピック化〕という3つのタイプである。

初級では、Tの発話の一部をくり返す例がみられた。特に表4（3）の〔音のみのくり返し〕のように、質問の意味がわからなくても聞き取れた音のみをくり返す様子が観察された。また初級、中級では、表4（8）の〔単語のくり返し〕のように、Tの質問の意味や意図は理解しているものの、スムーズに実質的な答えを返すことができない単語のくり返しがみられた。こうした例では、その単語について考えていることを示し、ターンを維持しつつ、自ら発話を続けようとしている様子がみられた。

前出表3のaの〔トピック化〕については、どのレベルにおいても観察されたが、レベルによって「くり返し」の前後の表現に違いがみられた。表4の（11a）は初級、（11b）は超級の例である。（11a）の初級では、「日本の経済」をくり返すのみだが、（11b）の超級では、「このあとは」とくり返し、ターンを維持しつつ「そうですね」と述べて、一息ついたあとに、「アルバイトがありまして」と質問に対し、答え始める。「くり返し」を用いるだけでなく、他の表現も加えて考えていることがわかる。

次に、前出の表3の「b. 母音類」では、初級の場合「あー」「んー」といった母音を伸ばす音を「考えている」表現として用いていた。例えば（12）のような例である。

（12） T：【姓】さんの家から上野までどうやって行くんですか

I： あー、にっじゅう、＊、あーじゅうひゃくー、よんーえん〈あーあ〉、あ、いえ、110円 ｛笑｝〈110え〉、ひゃくよん… 〈初級-上A 227〉

（12）では、IはTの質問を間違って解釈しているのだが、「あー」と言った後も言いよどみながら何とか答えようとしている。こういった母音を伸ばす音は母語の影響も考えられるが、今回分析対象とした「考えている」表現以外にも、「あー」が観察され、同じ「あー」であっても、肯定、理解、気づき等の意味で、イントネーションによって使い分けていることがわかった。

「c. えっと類」や「d. 接続詞」は、中級以上にみられた。（13）のような例である。（13）では、「例えば」と発し、具体的な例を示すことで、Tへの応答をしようとしているが、うまく説明できず「えっとー」を用いて話す内容を考えている様子が窺える。

（13） T：（仕事の）どんなところが大変でしたか

I： 例えばー〈ん〉えっとー、がいこくー［外国］の〈ん〉お客さんの、えとー、｛息を吸う音｝ 〈中級-上D 309〉

一方、上級、超級では、「e. まあ類」「f. 指示詞」「g. 副詞・感動詞」「h. そうですね」「i. メタ言語表現」などの表現が観察された。「e. まあ類」では、表1の（4b）のような例がみられた。（4b）は「遠い」をすぐにくり返すのではなく、「まあ」と発し、考えた上で相手の発話に同意している。

（4b） I： そうですねま電車で4時間ぐらいで、400キロぐらいですね

T： はー、＊でも遠いですよね ｛笑｝

I： まあ遠いといえば遠いですけども〈んー〉、まあ ｛笑｝ 〈超級G 230〉

「f. 指示詞」では、(14) のような例がみられた。「あの（ー）」は初級の教科書でもよく扱われている表現であるが、今回の調査では上級、超級でしか観察されなかった。超級による (14) の例では、「あのー」と音を伸ばした上で「そうですねその」と話を続け、「考えている」表現を組み合わせて使用する例が観察された。

(14) T： 日本、日本はなんか ｛笑｝ 南、北から南まで★02★長い、ですけど〈そうですね〉、どのあたりと同じぐらいですか

I： あのー、そうですねその、北京はちょうどほら東京と同じ、緯度に〈はい〉、あるんじゃないですか 〈超級G 230〉

また「h.そうですね」は (15) のような例である。TはIに説明を求めており、ターンを受け取ったIの「そうですね」に同意の意図はない。IはTの発話を一旦受け止めた上で、「えっとーやっぱり」とさらに「考えている」表現を複数用いながら、質問に答える準備をしていることがわかる。同意の「そうですね」は中級でもみられたが、このような「考えている」際の「そうですね」の使用は上級、超級のみであった。

(15) T： …どんなことを考えますか貧富の差を少しでも縮めるために

I： んー、そうですね〈はい〉、えっとーやっぱり、1番根本的なこと考えるとやっぱり1番違うのが農村と都市ですよね… 〈上級-上E 259〉

さらに、(16) のような「i.メタ言語表現」を用いたものがみられた。この例は相手の発話内容に言及しつつ、これから話すI自身の発話がどのような内容を含むのかを導く役割を果たすものである。

(16) T： …でえとー【姓】さんは〈はい〉えーとそのー、何も与えられないでそのその場でいうの、と〈はい〉、＊与えられたのとどちらがいいと思いますか

I： そうですね ｛笑｝ 難しい質問ですねそれは〈はい〉、私前は、前もって準備したほうがやりやすいと思っていたんですよ 〈上級-上E 259〉

## 5．3．考察

調査2では、上級が初級、中級ほど「⑧考えている・時間稼ぎ」としての「くり返し」を用いない理由を探るために再検討を行った。その結果、前出表3からわかる通り、上級、超級は、「a.くり返し」以外にも「e.まあ類」「f.指示詞」「g.副詞・感動詞」「h.そうですね」「i.メタ言語表現」など、様々な表現を使っている。また、上級、超級の例をみると、(15)「んー、そうですね〈はい〉、えっとーやっぱり」、(16)「そうですね ｛笑｝ 難しい質問ですねそれは」などのように、単独ではなく組み合わせて使用している。上級以上で「くり返し」が減る理由は、「考えている」表現のバリエーションが増え、それらを組み合わせることができるようになるからではないかと考えられる。また、「くり返し」についてもデータの見直しを行った。その結果、〔トピッ

ク化〕において上級、超級では、Tの発話の一部をただくり返すだけでなく、その前後に「考えている」表現を加えており、質的にも初級、中級とは異なることも明らかになった。

母音などを伸ばす「a.母音類」は、初級や中級で多くみられることが土屋（2013）でも指摘されており、「あー」「んー」や単語のみのくり返しなどは質問への答えが準備できていない状態を示すものであると捉えることができる。特に、初級では、前出（12）のように「あー」と言ったものの、次に続く発話は質的にも整っておらず、答えがすぐには出て来なくて頭の中で探している様子が推察される。

中級では、「c.えっと類」が観察された。「ええと」については、定延・田窪（1995）が「ええと」は話し手が一旦、「心的操作（たとえば検索や計算）」（定延・田窪1995：78）に入っていることを表し、結果としてこの心的操作のために「聞き手とのインターフェイスを一時遮断する宣言として働く」（定延・田窪1995：79）と説明している。中級にみられる「えっと」は、相手の存在を認めながらも一旦遮断し、単に何か発することでターンを維持している状況であるといえる。（13）では、「えっとー」と言って相手を待たせつつ、仕事についてどう説明すべきか考えを巡らしているようである。

上級、超級の「f.指示詞」の「あの（ー）」の使用は松田他（2013）でも指摘されている。定延・田窪（1995）は「あの（ー）」の使用は、話し手が「聞き手の存在を予定する心的操作」（定延・田窪1995：79）であると述べている。このことから上級、超級では相手を意識して「あの（ー）」を使用していると考えられる。「f.指示詞」の「それは」や「g.副詞・感動詞」の「やはり」については、Iの発話に先行するTの発話内容を関連付ける表現であり、Tの話にIの話を効果的につなげている。「h.そうですね」については、小出（2011）がその性質の一つとして、先行文脈を受けその話題を捉え直した上で、自身の表出を行うことを示すと指摘しているが、上級、超級がこの表現を使用したのは、Tの発話を受け入れつつ談話を次の段階に進めようとしているからだと思われる。「難しい質問ですね」などの「i.メタ言語表現」は、西條（1999）が定義するように、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現であることから、Iが一方的に発しているものではないという特徴がみられる。

以上のことから、初級、中級が「a.くり返し」「b.母音類」「c.えっと類」を用いる場合は、相手のためというよりは自分のための「時間稼ぎ」であると考えられる。一方、上級、超級が用いる「f.指示詞」「g.副詞・感動詞」「h.そうですね」「i.メタ言語表現」に共通する点は、Tの発話に対する関連付けであり、相手を意識した発話であるという点である。このことから、上級、超級の「考えている」表現は、双方向のやり取りの中で談話を作り上げる構成要素の一つになっていると考えられる。

## ６．まとめ

### ６．１．応答開始時の「くり返し」が示すレベル別特徴

牧野他（2001）によるとOPIでもTとIの間にインターアクションが必要だという。本研究の示した応答開始時の「くり返し」はその一形態であり、TとIの相互的なやり取りの中で使用されていた。図1-1～1-3は、インタビューの際の応答開始時の「くり返し」が示すTとIの関わりである。これはIがTに依存する初級段階から、中級、上級、超級へと自立に向けて緩やかにシフトしていく過程を図式化したものである。

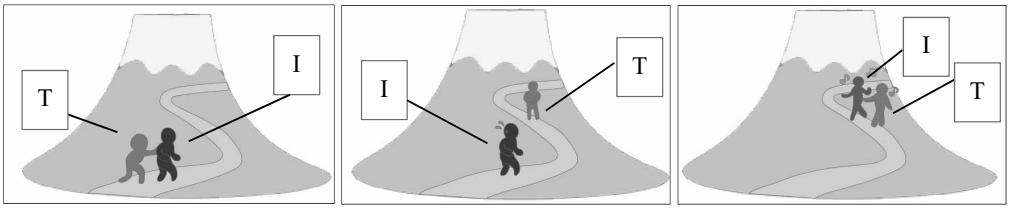


図1-1　初級　　図1-2　中級　　図1-3　上級・超級

図1　応答開始時の「くり返し」が示すレベル別特徴

まず、図1-1の初級レベルのIは「くり返し」において〈非自立期〉にあるといえる。IはTの質問の意図が理解できず「③聞き取れた音のみをくり返し」たり、単純なくり返しにより「④返答としてのくり返し」を行い、Tの発話に頼りつつ応答を試みようとする様子がみられる。またTによる「②受信応答」「⑤確認要求」「⑥説明要求」のくり返しが多いことから、初級レベルのIは一人で会話を進めることができず、Tに助けられながら会話を進めているといえる。次に図1-2の中級レベルのIは〈自立移行期〉にあると考える。中級になると「⑧考えている・時間稼ぎ」のくり返しが増え、相手の発話をくり返すことで会話を途切らせることなく、自ら「考え」たり、発話を作り出す時間を稼ぎ、自立した話し手に移行している段階になる。またTのくり返しに「②受信応答」「⑤確認要求」「⑥説明要求」が少ないことから初級ほど手を貸すことなく、一人で山を登ろう（自発的に話そう）とする中級話者をTが見守っていると考えられる。図1-3の上級、超級レベルのIは〈完全自立期〉といえる。IはTの発話を単純にくり返すのではなく、他の表現を加えることで、話題を広げることができ、IとTは対等の立場で、楽しく会話を進められるようになる。

### ６．２．応答開始時の「考えている」表現が示すレベル別特徴

インタビューにおけるやり取りの中で、質問にすぐに答えられないような場合に、「考えている・時間稼ぎ」とみられる発話が出現する。その一つが応答開始時の「くり返し」であるが、調査1で述べたように、レベルが上がるにつれてこうした「くり返し」は減少することがわかった。調査1では上級、超級の「考えている・時間稼ぎ」が少なかったことから、調査2では「考えている・時間稼ぎ」に着目し、応答開始時

から実質的な発話を始めるまでの間の「考えている」表現、またその発話から考えられるレベル別の特徴を明らかにした。

図2-1～2-3は、質問を受け取ったIが考えている際のレベル別特徴である。これは、Tの存在や発話を意識できない初級段階から、意識をし始める中級、そしてTの存在や発話に配慮し積極的に会話に関与していく上級、超級へと至る過程を示している。

初級レベルのIは「b. 母音類」が中心であり、Tに対して「考えている」状態を明示することはできない。つまり図2-1のように、Iは次に投げるボール（話す内容・表現）の準備ができず、ボールを探すのに精いっぱいで、相手を意識する余裕がない状態にあるといえる。中級レベルのIは「a. くり返し」や「c. えっと類」でターンを維持し、今考えているということを相手に宣言したり、「d. 接続詞」を用いることで相手の発話やこれから話す内容への関連付けをしたりしている。つまり図2-2のように、IはTの存在を認めた上で、ドリブルすることで相手に待ってもらいながら（ターンを維持しながら）、ボールを投げる準備段階にあることを示している。さらに上級、超級レベルのIは、単純な「a. くり返し」の使用や「考えている」表現の単独ではなく、「f. 指示詞」「g. 副詞・感動詞」「h. そうですね」を組み合わせたり、「i. メタ言語表現」を用いたりすることによって、Tへの意識や配慮を示し、積極的にそれまでの発話内容に言及したり、これから話す内容を導いたりすることができる。これにより上級、超級では考えている状態を維持しながらも、談話全体の流れや構成を崩すことなく、より話題を発展させることができると考えられる。図2-3のように、相手の反応を見ながら適切にパス（やり取り）ができるレベルにあることを示している。

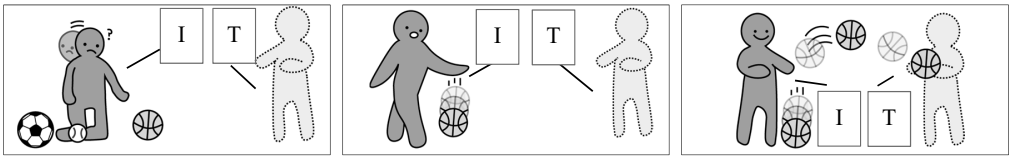


図2-1　初級　　図2-2　中級　　図2-3　上級・超級

図2　応答開始時の「考えている」表現が示すレベル別特徴

## 7．おわりに

調査1では、Iの「くり返し」の使用には〈非自立期〉〈自立移行期〉〈完全自立期〉といったレベル別特徴があり、Tの関わり方もIのレベルに応じて異なっていた。「くり返し」にはTの発話の意図がわからない、今考えているなどの機能があり、初級から取り入れやすい会話ストラテジーだといえる。また、指導の際も、教師は学習者の「くり返し」に今考えているという信号があることを理解し、簡単に助け船を出さずに待つという姿勢も必要であると考える。調査2の「考えている」表現においては、レベルが上がるにつれて使える「考えている」表現のバリエーションが増え、会話の相手を意識した発話が可能になることがわかった。「考えている」表現も、会話

における双方向のやり取りの中で談話を作り上げる一つの構成要素になっている。また、「考えている」表現にレベル別差異がみられたことから、指導の際に、初級では「えっと」、中級では「あのー」「そうですね」などを意識して扱うのも一つの方法ではないだろうか。今後の課題としては、二つの調査でわかったレベル別差異が中国語母語話者以外の学習者にも共通の特徴であるかを調査し、検証していきたい。

## 注

1）ACTFL-OPI（Oral Proficiency Interview）とは、ACTFL（アメリカ外国語教育協会）が開発した「外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテスト」（牧野他 2001：9）のことである。

2）国立国語研究所『日本語学習者会話データベース』
〈https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/〉（2020 年 8 月 10 日　アクセス）

## 参考文献


小出慶一（2011）「応答詞「そうですね」の機能について」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 47 巻第 1 号、85-97

西條美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房

定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構 ―心的操作標識『ええと』と『あの（ー）』―」『言語研究』第 108 巻、74-93

土屋菜穂子（2013）「日本語学習者のインタビュー応答時における言いよどみ使用」『第 3 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』153-160、国立国語研究所言語資源研究系・コーパス開発センター

中田智子（1992）「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告 104 研究報告集』13：267-302、秀英出版

福富奈美（2010）「日本語会話における『くり返し』発話について」『言語文化学研究（言語情報編）』第 5 号、105-125

牧野成一・鎌田修・山内博之・齊藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子（2001）『ACTFL-OPI 入門』アルク

松田真希子・宮永愛子・庵功雄（2013）「超級日本語話者の談話特性―テキストマイニングを用いた分析―」『国立国語研究所論集』第 5 号、43-63

Rost, M. and Ross, S. (1991). Learner use of strategies in interaction: typology and teachability. *Language Learning*, *41-2*, 235-273.

Tannen, D. (1989). *Talking voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse.* Cambridge University Press.



本研究は 2020 年度日本語 OPI 研究会の研究助成を受けたものです。